

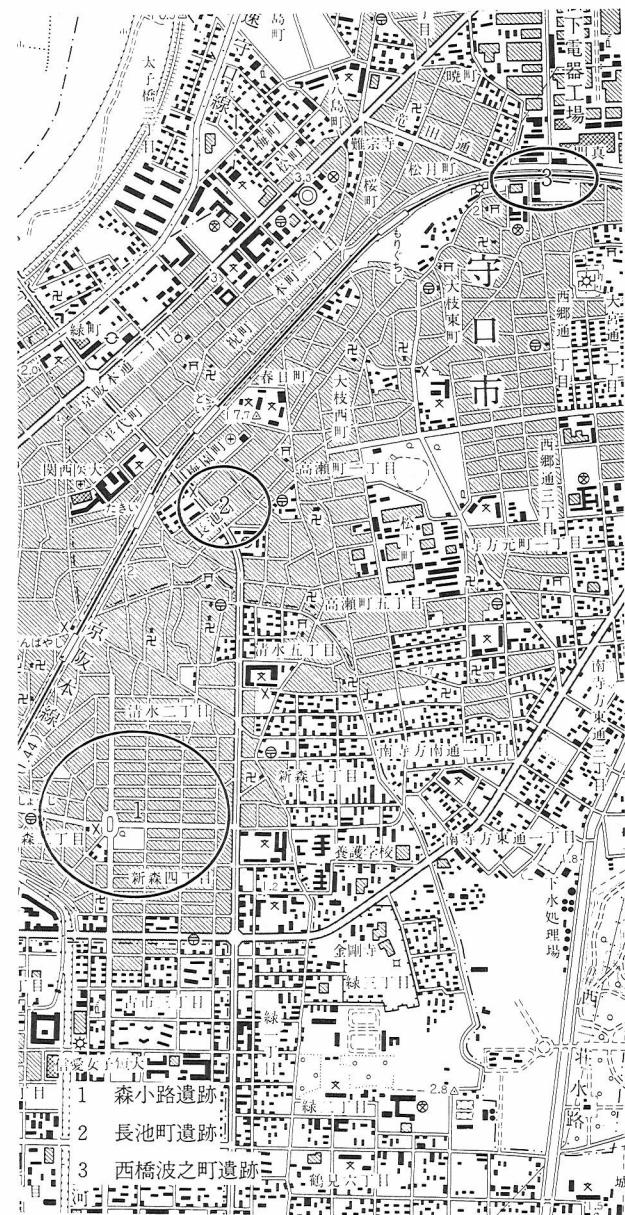
大阪市森小路遺跡で採集された遺物

福 永 信 雄

I. はじめに

森小路遺跡は、大阪市旭区新森2丁目～5丁目にかけてひろがる弥生時代・古墳時代の複合遺跡である。この遺跡は昭和6年、大阪市森小路区画整理組合による住宅開発によって発見された。その折、有光教一・島田貞彦氏や、八木博氏の主宰された「趣味の考古学会」によって調査が行なわれ、弥生土器・石器・土師器・須恵器などが出土した。その結果は、有光・島田両氏によって考古学雑誌に報告（以下、「有光氏らの報文」と略す）されている。

この報告以降、森小路遺跡は、弥生時代中期の大都市内における代表的な遺跡の一つとして広くしられるようになった。その後、遺跡発見のきっかけとなった住宅開発が完了し、遺跡の上に住宅が建ちならぶようになった。そのため、遺跡地一帯の再開発に伴なう最近の大都市教育委員会の調査をまつまで、本格的な調査は約30年間、実施されなかった。この間、新森5丁目に在住されていた伊東正一氏は、昭和29年から36年のあいだに各道路で行なわれた下水管敷



第1図 周辺地形図大阪東北部

設工事などによる遺跡の破壊で出土する遺物を独力で採集され、あわせてそれまで不明確であった遺跡の範囲の大略を確認された。採集された経過や採集遺物の一部は、伊東氏によって「大阪市森小路遺跡の再発掘について」として、簡潔にまとめられている。^③しかしガリ板刷りであることや部数の少ないこともあって、あまり広くしられていない。

筆者は4年前、伊東氏のご配慮で採集された遺物の見学と、その一部を実測させていただく機会をえた。今回、紹介しようとするのはその折、実測させていただいた遺物である。遺物の紹介を許された伊東氏のご配慮に対し、はじめに心より感謝の意を表する。なお、伊東氏は、採集品のすべてを昭和53年4月に大阪市立博物館に寄贈された由である。

II. 遺物の採集地点・状況

伊東氏が遺物を採集された地点は、京阪電車京都線森小路駅の東約400mに所在する新森公園を南西端とし、北へ東西約450m・南北約300mの方形の範囲内の道路である。現在の町名では、新森4丁目～5丁目にあたる。この付近は、淀川南岸の低地にあたり標高は約3mである。

伊東氏の観察によれば、採集地点の土層は「表面約30cmの黄褐色の砂混り粘土層の下に約40cmの黒色有機粘土層があり、その下は黒砂層が深く続き湧水しており、土地の形成を察することができる。土器その他の遺物は、中間の黒土層に多数包含されている。」という状況であった。^④この所見は、筆者がかつて確認した地点の土層の状況と基本的に異ならない。また、有光氏らの報文にみえる土層と比較しても、最上層の粘土層を白砂(層)とされている以外は、大きく異ならない。この程度の異なりは、土層を確認した地点によるものであろう。

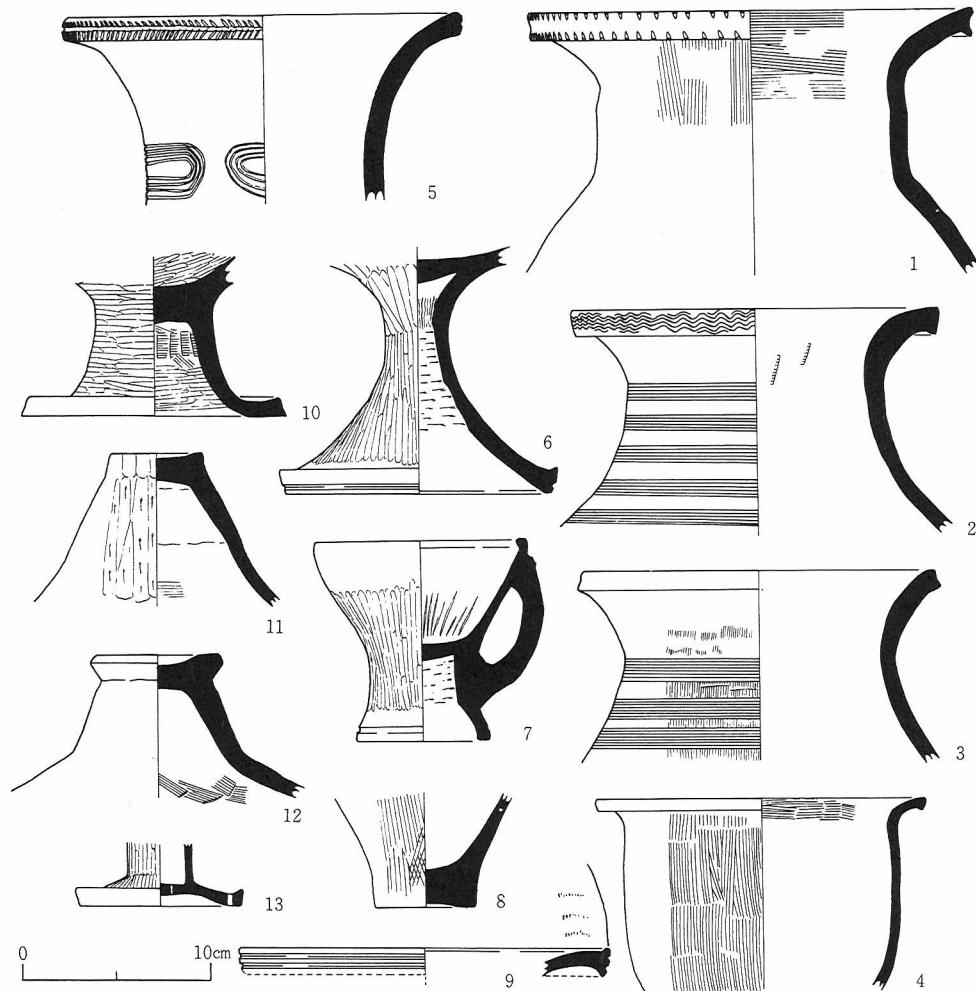
したがって森小路遺跡の遺物包含層は、現代の盛土を除いたもとの地表面より20～30cm下に存在する厚さ20～40cmの黒色有機粘土層と考えられる。ただ、黒色有機粘土層に土師器・須恵器と弥生土器などが、どのような関係で包含されているかは不明である。

III. 遺物

伊東氏が採集された遺物は、弥生土器・石器・須恵器・土師器である。遺物の大半は弥生土器が占める。今回紹介するのは、先記したように採集遺物の一部であるが、代表的なものはほとんど実測できたと考えている。実測した遺物の点数は、弥生土器13点・石器2点(弥生時代)・須恵器1点・土師器1点(古墳時代)の計17点である。以下、弥生時代の遺物から順に説明していく。生駒山地西麓の土器としたのは、茶褐色で金雲母と角閃石を含む胎土をもつ土器である。

弥生時代の遺物

弥生土器 壺(図1) 直立した頸部と外反する口縁部をもつ壺である。口縁端部外面を下方に少し拡張する。胴部中位より下を欠失。胴部と頸部外面は、刷毛目を施したのち、ナデで調整している。頸部から口縁部にかけての外面は縦方向の刷毛目を施している。口縁端部外面の上下の縁にヘラによる刻み目を施している。頸部から口縁部にかけての内面は、横方向の刷毛目を施している。口径23.4cm。



第2図 弥生土器

器形と刷毛目が完全に消されず少し残っていることからみて、I様式新段階に属す。

弥生土器 壺(図5) 長い頸部と大きく開く口縁部をもつ壺である。口縁端部は角ばって終る。胴部以下を欠失。内外面とも風化しているため、調整手法は不明。口縁端部外面にヘラ描きの綾杉文、頸部外面に4条のヘラ描き流水文を飾っている。口径20.6cm。

器形とヘラ描き流水文からみて、I様式新段階に属す。弥生式土器集成 b 形態の壺である。生駒山地西麓の土器。

弥生土器 壺(図2) 外弯して開く口頸部をもつ壺である。口縁端部は、外面を下方へ少し拡張する。胴部中位より下を欠失。頸部と胴部の外面はナデを施したのち、櫛原体数6本の櫛描き直線文で飾っている。口縁端部外面は、櫛描き波状文で飾っている。頸部と胴部内面はナデを施している。口径19.4cm。器形と櫛描き直線文などからみてII様式に属す。

弥生土器 壺(図3) 口縁部が短かく、かつ開きのすくない壺である。口縁端部は角ばって終る。胴部中位より下は欠失。頸部と胴部外面は、刷毛目を施したのち、櫛原体数9本の櫛描

直線文を頸部から下に飾っている。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキを施している。頸部内面は口縁部内面のヘラミガキより粗い横方向のヘラミガキを施している。口径 18.8cm。器形と櫛描直線文をみるとことからⅡ様式に属す。

弥生土器 壺(図9) 口縁端部外面をわずかに上下に拡張した壺である。頸部以下を欠失。口縁端部外面に2条の凹線を施している。口縁部内面は、櫛描きの列点文で飾っている。口径 19.4cm。凹線や櫛描き列点文をみるとことから、Ⅲ様式新段階からⅣ様式に属す。

弥生土器 餰(図4) 倒鐘形の器体をもつ甕である。口縁部は外反し、口縁端部が少しまきこみ気味に終る。胴部下半を欠失。胴部と頸部の外面は縦方向の刷毛目を施している。口縁部内面は、ヨコナデののち、横方向の刷毛目を施している。胴部外面に煤、内面に有機物が付着している。口径 17.4cm。器形からみてⅡ様式に属す。いわゆる大和型の甕である。

弥生土器 餰(図8) 胴のはらない凹み底の甕である。胴部より上を欠失。底部外面は粗い縦方向の刷毛目内面はナデを施している。底部外面に煤が付着している。底径 5.4cm。

器形と外面の粗い刷毛目からみてⅡ様式に属す。

弥生土器 甕蓋(図11) 笠形の甕の蓋である。口縁部を欠失。体部外面は下から上へのヘラ削り、内面はナデを施している。口縁部に近い体部内面に横方向の刷毛目を施している。つまみの外面に指頭圧痕が残る。つまみ最大径 5.0cm。器形からみてⅡ様式に属す。

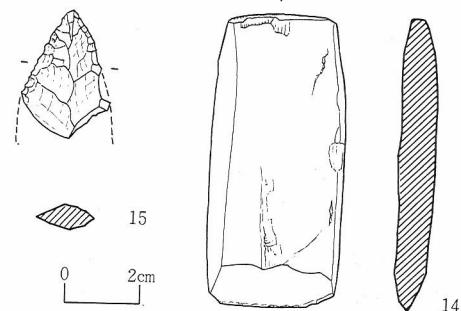
弥生土器 甕蓋(図12) つまみの部分がひろがって一種のあげ底状を呈する甕の蓋である。口縁部を欠失、体部は内外面ともナデを施している。口縁部外面はナデ、内面は刷毛目を施している。つまみの最大径 7.0cm。あげ底状を呈するつまみなどの器形からみてⅢ様式に属す。

弥生土器 把手付台付鉢(図7) 脚台部は、中空の柱状部とあまりひらかない裾部からなっている。鉢部は椀形を呈する。鉢と脚台をつなぐ1個の環状把手がついている。口縁端部は内側に肥厚して終る。裾部に1条の凹線をめぐらしている。柱状部から鉢部の外面にかけて縦方向のヘラミガキを施している。脚台部と鉢部の接合は円板充填の手法で行なっている。口径 11.2cm、器高 10.5cm。器形と凹線がみられることからⅢ様式新段階からⅣ様式に属す。

弥生土器 台付鉢(図10) 柱状部が中空で裾の発達しない脚台部をもつ台付鉢である。裾端部は角ばって終る。鉢の大半は欠失。脚台部外面は横方向のヘラミガキ、内面は上半を刷毛目、下半を刷毛目を施したのち、横方向のヘラミガキをかけている。鉢底部内面はヘラミガキを施している。鉢部と脚台部の接合には、円板充填の手法を用いていない。裾部径 14cm。

器形と円板充填の手法を用いないことからⅡ様式からⅢ様式古段階に属す。

弥生土器 高杯(図6) 柱状部が中空で、裾部のひろがる脚部をもつ高杯である。裾端部外面は、少し上方に拡張する。杯部の大半は欠失。



第3図 石 器

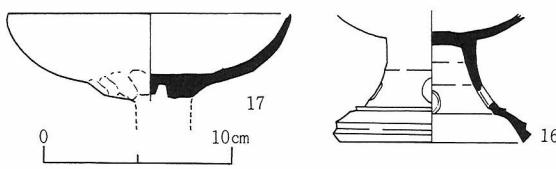
脚部外面は、縦方向のヘラミガキ、内面は時計回りのヘラ削りを施している。裾端部外面に一条の凹線をめぐらしている。杯部と脚部の接合は、円板充填の手法で行なっている。裾部径14cm。

器形と凹線をみるとことからⅢ様式新段階からⅣ様式に属す。

弥生土器 脚部(図13) 直立した中空の柱状部にひろがる裾部をもつ脚部である。脚部の上半より上が欠失しているため、器形は、台付鉢か高杯になるか不明。裾端部外面は上方に少し拡張している。裾部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデを施している。柱状部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は逆時計回りのヘラ削りを施している。裾部と裾端部の境に外からあけた径3mm前後の円孔を8個、縁にそってめぐらす。内面に、円板を充填し柱状部と裾部の境としている。充填した円板の中央にも、径1mm前後の円孔を6個あけている。裾部径8.6cm。器形と円板充填の手法からみて、Ⅲ様式に属す。生駒山地西麓の土器。

以上、紹介したように採集された弥生土器は、Ⅰ様式新段階からⅣ様式にいたる各時期のものがみられる。従来、しられていなかったⅠ様式新段階の土器が含まれているのが注目される。採集品からは、図化した2点しか確認できなかったが、最近の大阪市教育委員会の調査でこの時期の土器が出土している。^⑧したがって森小路遺跡は、すくなくともⅠ様式新段階の時期に開始されたといえる。廃絶は、採集品と有光氏らの報文に載せられた土器の図をみると、Ⅳ様式の時期と考えられる。

石器 扁平片刃石斧(図14) 平面形が長方形を呈す完形の扁平片刃石斧である。両側面は研磨が良好であるが、上面と下面はほとんど研磨されていない。刃部は、ていねいに研磨してつくりださせる。刃部の一端に使用による磨耗がみられる。全長7.7cm・幅3.6cm・厚さ1cm。



第4図 須恵器・土師器

石材は緑色片岩である。

石器 石槍(図15) 石槍先端部の破片である。小破片のため全形を推定できない。側辺に細かい押圧剝離をくわえて刃をつくりだしている。

槍身中央に鎬が通り、断面は扁平な菱形を呈する。現存長3.2cm・厚さ6mm。石材はサヌカイトである。

実測した石器はこの2点であるが他に凸基無茎式石鎌・石包丁・大型蛤刃石斧なども採集されている。有光氏らの報文には、以上の器種とともに柱状片刃石斧・石錐・平基無茎式石鎌などの図や写真が載せられている。いずれも弥生時代の石器に通有のものである。

古墳時代の遺物

須恵器 高杯(図16) あまりひらかない短い脚部をもつ高杯である。裾端部は角ばって終る。杯部の大半は欠失。脚部は内外面ともヨコナデで仕上げている。裾部に2条の凸線をめぐらす。脚部中央に相対して、径1cm前後の円形のスカシ孔が4個、外からあけられている。裾部径9.8cm。^⑥器形からみて陶邑編年のI型式第2段階に属す。

土師器 高杯(図17) 梱形の杯部をもつ高杯である。口縁部はやや内弯する。口縁端部はと

がり氣味に終る。脚部を欠失。内外面とも風化しているため調整は不明。杯底部外面に指頭圧痕が残っている。口径15.2cm。器形からみて、船橋0—Ⅱ^⑦に併行する時期に属す。

実測した須恵器・土師器は、この2点である。須恵器は他に甕の口縁部・有蓋高杯の蓋など、土師器は、紹介した高杯とは別個体の脚部などが採集されている。採集されている須恵器と土師器は、いずれも器形文様などからみて同一時期に属すものである。有光氏らの報文には、土師器の高杯・甕・角状把手の図が載せられている。また、須恵器の壺や高杯が出土していることも本文中に述べられている。

有光氏らの報文にみえる土師器も図から判断して、船橋0—Ⅱ併行の時期に属すと考えられる。したがって須恵器・土師器とも、5世紀後半の年代を与えることができる。この時期に森小路遺跡は再度、復活したのである。しかし、復活の期間は前後の時期の遺物がまったく存在しないことから、ごく短いものであったと考えられる。

M. おわりに

森小路遺跡は、先記したように弥生時代前期末から中期（I様式新段階からIV様式）と古墳時代中期後半（須恵器=I型式第2段階・土師器=船橋0—Ⅱ併行）の遺物を包蔵する複合遺跡である。遺跡の性格は遺物や立地からみて、両時代の集落址とみてさしつかえない。

森小路遺跡と同様の継続期間をしめす畿内の弥生時代遺跡は、たとえば摂津の勝部遺跡（豊中市）、河内の鬼虎川遺跡（東大阪市）などいくつかしられている。いずれも各地域を代表する大遺跡である。このような長期にわたる継続期間をしめす遺跡は、安定した生産基盤が存在したゆえに成り立ったと考えれば、森小路遺跡も大遺跡になる可能性が高い。なお、弥生時代後期に遺跡が一旦廃絶したのち、古墳時代中期後半に一時再開されるのは、この時期に行なわれた河内平野の開発に關係するのかもしれない。

注

- ① 有光教一・島田貞彦 「大阪市東成区森小路発見の弥生式遺跡について」『考古学雑誌』 第21巻10号所収 1931年刊
- ② 中川晋作 「森小路遺跡」『日本考古学年報27』 1974年版所収 1976年刊 八木久栄 「森小路遺跡」『日本考古学年報29』 1976年版所収 1978年刊
- ③ 伊東正一 『大阪市森小路遺跡の再発掘について』 1963年刊
- ④ ③に同じ
- ⑤ 「森小路遺跡採集の土器」『調査会ニュース』No.4 所収 1976年刊
- ⑥ 中村浩 「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第30輯』 1978年刊
- ⑦ 原口正三・田辺昭三他 『船橋Ⅱ』 1958年刊
- ⑧ 大阪市教育委員会中尾芳治氏のご好意で実見、東大阪市立郷土博物館『もちはこぼれた河内の土器』 1980年刊